

Ⅳ 総合的考察及び今後の課題

昨年度の研究テーマの模索、理論学習と実態把握に引き続き、本年度は理論整備と実践を行ってきた。以下、児童生徒のめざすコミュニケーション像に迫るために重視した「授業づくり」を中心に、児童生徒の変容も交えながら、成果と今後の課題について考えてみた。

授業づくりの観点にそって述べてみたい。

まず、単元や題材の設定及びその配置についてである。児童生徒の実態を基に、直接的あるいは間接的にコミュニケーションの力を高めるための題材を検討し配置した結果、効果的な題材を見つけることができた。また、繰り返しや発展による積み上げによって、コミュニケーションの力がつきつつあるという報告もなされた。課題としては、さらに効果的な題材の選択、同一教科領域内での単元の系統性、他の教科・領域との関連を図ることが挙げられる。

次に、指導者の関わり方についてである。できる限り教師主導型の展開にならないように留意し、待ちの姿勢をとり、より良い聞き手となることに心がけた。その結果、児童生徒は、思いを自分なりの表現で表したり、必要に応じて他に働きかけたりするようになりつつある。課題としては、集団場面での待ちにも限界があり、どう対応していくか、受容的態度と指示的態度のかねあいをどうするかが挙げられる。

最後は、個を生かす指導の工夫についてである。コミュニケーションに関する個別の目標を設定し、個別指導の時間確保に努めたり、各学部の実態に応じたグループ編成を工夫したりして、個に応じた手だてが行われやすくなった。その結果、個別指導やグループ指導の場では、一人ひとりが意欲的に表現しようとする姿がみられるようになった。個別指導やグループ学習でつけた力を集団の中や実生活で生かすように試みたが、さらに継続した取り組みや見直しを行いたい。

「授業づくり」以外の観点では、評価方法の検討を課題として挙げるができる。はたして、児童生徒のコミュニケーションの力が高まったかどうか評価したい。あわせて、その子どもの評価から、我々の指導方法が適切であったかどうかの評価もしたい。また、段階別教育内容表に照らしあわせて社会的自立度をみたととき、全体的な発達がみられ、社会で生かし使える力になったかどうかといった点も評価していきたい。

来年度は、本研究の3年次にあたり、最終年次となる。本年度の取り組みをさらに充実したものとして実践を重ねていきたい。